お貞のはなし

THE STORY OF O-TEI

小泉八雲作・田部隆次訳

登場人物

長尾

お貞

ナレーター

一場

◆新潟の長尾長生は、許嫁のお貞を亡くす。
◆ナレーター、長尾、お貞

昔、越後国新潟の町に長尾長生と云う人があった。

長尾は　医者の子であった。それで父の業をつぐべき教育をうけた。小さい時に　父の友人の娘お貞と云うのと婚約が　できていた。長尾の修行の終り次第　婚礼をあげる事に両家とも一致していた。しかしお貞の健康のすぐれない事が分って来た。それから、十五の年にお貞は、不治の肺病にかかった。死ぬことが分った時、彼女は、わかれを告げるために長尾に来てもらった。

長尾が彼女の床のわきに坐ると、彼女は云った。

お貞　『長尾さま、私達は子供の時からお互にきまっていました。そして今年の末に結婚する筈でした。しかし今私は死にかかっています、――これも神仏の思召です。もう何年か生きていましたら私は　他人の迷惑や心配の種子になるばかりでしょうから。こんな弱いからだでは　よい妻になれるわけは　ありません。ですから　あなたのために生きていたいと願う事さえ　余程我ままな願でしょう。私全くあきらめています。それであなたも悲しまない事を約束して下さい。……それに私達は、又あえると思います。それをあなたに云いたいのです』……

長尾　『本当だ、又あえるとも』

長尾は熱心に答えた。

長尾　『そしてあの浄土では　別れると云う苦痛はないのだから』

お貞　『いいえ、いいえ』

彼女は静かに答えた

お貞　『浄土での事では　ありません。明日葬られますけれども――

この世で再びあう事にきまっていると信じています』

長尾は不思議そうに彼女を見た。彼の不思議そうにしているのを見て、微笑している彼女を見た。彼女は　おだやかな夢のような声で続けた、――

お貞　『そうです。この世のつもりです――あなたのこの今の世でです。

長尾さま、……全くあなたもおいやでなければ。

……ただそうなるために私もう一度　子供に生れかわって女に成人せねばなりません。それまで、あなたは　待っていて下さるでしょう。十五年、十六年、長い事ですね、……

しかし私の約束の夫のあなたは今やっと十九です……』

彼女の臨終を慰めようと思うばかりに、彼は　やさしく答えた。

長尾　『私の約束の妻、あなたを待っている事は　義務であり又嬉しい事です。私共は七生の間お互に誓ってあるのです』

お貞　『しかしあなたは疑いますか』

彼女は彼の顔を見つめながら尋ねた。

長尾　『他人のからだになって、他人の名になっているあなたが分るかどうか疑われます、――何か、しるしか証拠を　私に云ってくれなければ』

彼は答えた。

お貞　『それはできません』

彼女は云った。

お貞　『どこでどうしてあうか神仏だけが御存じです。しかしきっと本当にきっと、もしあなたが　おいやでなければ　私はあなたの処へかえって来る事ができます。……それだけ覚えていて下さい』

彼女は　ものを云わなくなった。それから眼を閉じた。彼女は死んでいた。

二場

◆何年も後、長尾は旅で訪れた伊香保でお貞によく似た娘に会う。
◆ナレーター、長尾、お貞

長尾は　心からお貞になついていた。それだけに彼の悲しみは深かった。彼は　お貞の俗名を書いた位牌を造らせた。そしてその位牌を仏壇に置いて、毎日その前に供物を捧げた。彼は　お貞が丁度死ぬ前に云った不思議な事について色々考えた。そして彼女の　魂を　慰めようと思って、もし彼女が　他人の　体でかえってくる事があったら、彼女と結婚しようと云う真面目な約束を書いた。この書附にした約定に彼の印を捺し、それを封じて仏壇にあるお貞の位牌のわきに置いた。

しかし長尾は　一人息子であったから、結婚する事が　必要であった。彼は家族の　願に余儀なく従って、父の選んだ妻を迎えねばならなくなった。結婚してからも続いて、お貞の位牌の前に供物を捧げた。そしていつも情け深く彼女を覚えていた。しかし彼女の　姿は、彼の記憶から次第にうすくなって行った。――思い出し難い夢のように、そして歳月はすぎ去った。

その歳月の　間に多くの不幸が　彼の身の上に起った。両親がなくなった、――それから彼の妻と一人児が　なくなった。それで彼は　この世界に只一人となった。彼は　淋しい家を捨てて悲しみを忘れるために長い旅に上った。

旅の間に、ある日、温泉とその周囲の美しい風景とのために、今も名高い山の村、伊香保についた。彼の泊った村の宿で、一人の若い女が彼の給仕に出た。彼女の顔を始めて見て、未だかつて覚えない程の胸のとどろきを覚えた。それ程不思議にも彼女はお貞にそっくりなので、彼は夢でないかと、自分をつめって見た程であった。彼女が火やお膳を運んだり部屋をかたづけたりして、行ったり来たりする時――彼女の立居振舞は彼が若い時の約束の少女の貴き記憶を彼に起させた。彼は彼女に話しかけた。彼女は柔かなはっきりした声で答えた、その声の美しさは、ありし日の悲しさで、彼を悲しくさせた。

それで彼は甚だ不思議に思って、こう彼女に問うた、――

長尾　『ねいさん、あなたは昔、私の知っていた人にあまりによく似ているので、あなたがこの部屋へ始めてはいって来た時、びっくりしましたよ。それで失礼だが、あなたの郷里と名前をきかして下さい』

直ちに――亡くなった人の忘れられない声で――彼女は答えた。

お貞　『私の名はお貞です、そしてあなたは私の許嫁の夫、越後の長尾長生さんです。十七年前、私は新潟で死にました。それからあなたは、もし私が女のからだをしてこの世にかえって来れば、私と結婚すると云う約束を書附になさいました、――そしてあなたはその書附に判を捺して封をして、仏壇の私の名のある位牌のわきに納めました。それで私帰って参りましたの』

彼女はこの最後の言葉を発した時、知覚を失った

長尾は彼女と結婚した、そしてその結婚は幸福であった。しかしその後どんな時にも彼女が伊香保で彼の問に対する答に於て、何を云ったか思い出せない。なお彼女の前世については何も覚えていない。その面会の刹那に不思議に燃え上った――前世の記憶は、再び暗くなって、そしてそれから後そのままになった。

〈完〉

原案

『夜窓鬼談』より「怨魂借体」

石川鴻齋

一場

長尾杏生は、越後新潟の人なり。家世、軒岐の術を業とす。弱冠にして父に代て患者を診す。

某樓に一妓有り。阿貞と名づく。久しく悒鬱の病を患う。偃臥数旬、客に接すること、能わず。生、屢これを診視す。三月を閲して全癒を得たり。

生、標致秀雅、また、詼諧を能くす。常に人をして喜笑せしむ。阿貞の癒る、薬剤の効によるといえども、実は杏生のその鬱悶を慰諭するをもってなり。

一夜、阿貞、盛醼を設け、生を招て曰く、

「君の厚意によりて、枯骨に肉することを得たり。聊か薄饌を供して、将にもって鄙忱を表せんとす。冀くは一杯を喫せよ」

乃ち、諸妓を聘して、歌舞、興を扶く。生、酔ること、甚し。玉山、すでに頽れ、盃盤、狼籍たり。貞、水を与え、背を撫して曰く、

「夜深く、雨、催す。請う、牀に就て睡れ」

生、いまだ醒めず。乃ち、一室に入り、褥に坐して戯て曰く、

「久しく客に接せず、耦を思うこと、無きや否」と。

貞、笑って曰く、

「懇君のごとき者、なし。安んぞ、耦を思わんや」と。

生、曰く、

「卿、若し僕を欺かずんば、僕、また、誠を竭んのみ」と。

貞、流涕して曰く、

「重恩の人、何をもってか、これを報せん。君、もし、醜を棄ずんば、命をもって、これに事えん」と。

生、喜ぶ。

遂に同衾の歓をなす。

爾來、屢ここに来る。膠漆、啻ならず、稍や他妓の嬲るる所なる。

生の父、その遊蕩を憤り、念を一時に断たしめんと欲し、貲を齎て、江都に遣る。医博士某に従て業を研せしむ。生、やむことを得ず、簦を擔て郷を去る。復た、信を通ずることを得ず。

呵貞、聞て大に歎じ、病、再び発し、遂に、左明を失し、幾も無くして亡せり。

生、学に就くこと、五年、父を省み、郷に帰る。父、その遊蕩に懲りて、急に某氏を娶りて、これに妻す。生、弟、有り。継母の出と為す。母、弟をして家を継がしめんと欲す。

生、その意を知り、妻を携えて、再び、東京に来り、業を下谷に開く。

名声、漸く聞え、履屐、門に満つ。

二場

時に年四十、偶ま、左耳を聾す。百治、験無し。自もって不治の症と為す。復た、甚だ、療せず。

隣巷に術者、有り。能く吉凶禍福を知る。生と相い熟す。

生、術者に謂て曰く、

「余の聾を病む、また、禍源、有りや」

術者、沈思、稍や久し。眉を顰て曰く、

「二十年前、一婦人を欺くこと、無きか」

生、曰く、

「記憶する所ろ、無し」

曰く、

「この婦、晩に、左明を失して、遂に悒鬱して死す。怨念、滅せず。今猶お、累と為る。君、それ、熟づく思え」

生、愕然として始て、阿貞、祟りを為すことを知る。因て、具さに前事を告ぐ。

曰く、

「君は盛徳の人。怨鬼、近づくことを得ず。然れども、一念の凝結する所ろ、年を経て、猶お未だ、銷せず。宜しく霊を祀り、罪を謝すべし」

乃ち、「解怨の法」を授く。

生、則ち、壇を設け、霊を祀り、香華を供して、罪を謝す。且つ、翰を書し、曰く、

「余、盟に負くは、已むことを得ざるをもってなり。卿、もし、なお、余を慕うことあらば、願くは再生して盟を尋け。然れども、余、

年老え、気、衰う。或は、魂を、容貌、卿に肖たる者に憑託せよ。今世、復た、前縁を果すこと、有らん。我れ今ま、子、無し。幸に妾為ことを得て、一子を生まば、我の願、また足れり」

書し了る。これを壇前に焚く。

これより、耳の聾、稍や軽し。三年の後、全く瘳ることを得たり。

これより前き、父、没す。

生、また、屢郷にゆく。十三年の忌辰に了て、また、郷において祭を修す。

帰途、伊香保温泉に浴す。

客舎にある数日、婢有り、年、僅に破瓜に垂とす。而、容貌・音声、酷だ、阿貞に肖たり。

日夜、飲食・起臥の事、また、甚だ務む。

柔順・優愛、生を慕うに似たり。

一夜、更、深け、生、未だ眠らず、牀に在て書を読む。

婢、来て膏を加う。

生、戯れに婢に謂て曰く、

「汝の容貌、酷く我が知る所の女に肖たり。知らず、何れよりか来る」

婢、生の手を捕て嗚然として曰く、

「君、貞を忘ること、無や否や」

生、驚て、曰く、

「汝は阿貞の再生する者か」

曰く、

「君の誓言を信じて、君の帰郷を待つ。図らず、故病、再び起り、

遂に怨を呑て亡せり。一念、滅せず。往て、君が身を悩ます。後、君の書翰を得て、再生を俟たず、この女に体を借て、もって前縁を果さんと欲す。君、約を爽えず、速かに相伴い去れ。婢妾と為るを、厭わざるなり」

言い訖て悶絶す。気脈、断んと欲す。

生、急に水を与え、薬を啣ましむ。少頃ありて驀然として甦す。

生、問う、

「言う所ろ、記憶するや否」

曰く、

「知らず。唯だ、一女、体中に入るを覚ゆ。また、怨を述るを聴くのみ」

生、また、姓名と郷里を問う。泣て曰く、

「妾、名は貞。高崎某士の二女、父母、姉と、夙に世を辞す。田園・家財、盡く負債の為に奪われ、孤惸落魄、口を糊すること能わず。遂にここに来て傭と為る。主人、妾が薄命を憐れみ、かつ、その幺弱なるをもって、甚だ使役せず。独り、老媽有り、裁縫を事とす。妾、就て学ぶのみ」

言終り、歔欷。双涙、袖を濕す。

生、これを憐れみ、遂にその主に乞うて、妾と為す。

主もまた、大に喜び、為に衣服・妝具を貽る。駕を命じて、これを送る。

生、携え帰りて、これを他室に置く。幾もなくして、男を挙ぐ。生の妻、子、無をもって、これを愛すること、己の出のごとし。また、貞を愛すること、妹のごとし。

貞、長ずるに及んで、言語・挙動、毫も阿貞に異なることなし。

数年の後、妻、病をもって没す。死に臨んで、生に謂て曰く、
「貞、性、温厚謹直。妾、死するの後、請う、貞をもって、継妻と為せ。
他人を娶ること、勿れ」と。
これにおいて、貞、妻と為る。時に、年二十有五。
阿貞、二十有五にして、生に別れ。
貞、二十有五にして、正妻と為る。
また、奇なり。
友人青木氏、余がために話す。

〈完〉

THE STORY OF O-TEI

Lafcadio Hearn

A long time ago, in the town of Niigata, in the province of Echizen, there lived a man called Nagao Chōsei.

Nagao was the son of a physician, and was educated for his father's profession. At an early age he had been betrothed to a girl called O-Tei, the daughter of one of his father's friends; and both families had agreed that the wedding should take place as soon as Nagao had finished his studies. But the health of O-Tei proved to be weak; and in her fifteenth year she was attacked by a fatal consumption. When she became aware that she must die, she sent for Nagao to bid him farewell.

As he knelt at her bedside, she said to him:—

"Nagao-Sama[1], my betrothed, we were promised to each other from the time of our childhood; and we were to have been married at the end of this year. But now I am going to die;—the gods know what is best for us. If I were able to live for some years longer, I could only continue to be a cause of trouble and grief for others. With this frail body, I could not be a good wife; and therefore even to wish to live, for your sake, would be a very selfish wish. I am quite resigned to die; and I want you to promise that you will not grieve... Besides, I want to tell you that I think we shall meet again."...

"Indeed we shall meet again," Nagao answered earnestly. "And in that Pure Land[2] there will be no pain of separation."

"Nay, nay!" she responded softly, "I meant not the Pure Land. I believe that we are destined to meet again in this world,—although I shall be buried to-morrow."

Nagao looked at her wonderingly, and saw her smile at his wonder. She continued, in her gentle, dreamy voice,—

"Yes, I mean in this world,—in your own present life, Nagao-Sama... Providing, indeed, that you wish it. Only, for this thing to happen, I must again be born a girl, and grow up to womanhood. So you would have to wait. Fifteen—sixteen years: that is a long time... But, my promised husband, you are now only nineteen years old."...

Eager to soothe her dying moments, he answered tenderly:—

"To wait for you, my betrothed, were no less a joy than a duty. We are pledged to each other for the time of seven existences."

"But you doubt?" she questioned, watching his face.

"My dear one," he answered, "I doubt whether I should be able to know you in another body, under another name,—unless you can tell me of a sign or token."

"That I cannot do," she said. "Only the Gods and the Buddhas know how and where we shall meet. But I am sure—very, very sure—that, if you be not unwilling to receive me, I shall be able to come back to you... Remember these words of mine."...

She ceased to speak; and her eyes closed. She was dead.

Nagao had been sincerely attached to O-Tei; and his grief was deep. He had a mortuary tablet made, inscribed with her *zokumyō*[3]; and he placed the tablet in his *butsudan*[4], and every day set offerings before it. He thought a great deal about the strange things that O-Tei had said to him just before her death; and, in the hope of pleasing her spirit, he wrote a solemn promise to wed her if she could ever return to him in another body. This written promise he sealed with his seal, and placed in the *butsudan* beside the mortuary tablet of O-Tei.

Nevertheless, as Nagao was an only son, it was necessary that he should marry. He soon found himself obliged to yield to the wishes of his family, and to accept a wife of his father's choosing. After his marriage he continued to set offerings before the tablet of O-Tei; and he never failed to remember her with affection. But by degrees her image became dim in his memory,—like a dream that is hard to recall. And the years went by.

During those years many misfortunes came upon him. He lost his parents by death,—then his wife and his only child. So that he found himself alone in the world. He abandoned his desolate home, and set out upon a long journey in the hope of forgetting his sorrows.

One day, in the course of his travels, he arrived at Ikao,—a mountain-village still famed for its thermal springs, and for the beautiful scenery of its neighborhood. In the village-inn at which he stopped, a young girl came to wait upon him; and, at the first sight of her face, he felt his heart leap as it had never leaped before. So strangely did she resemble O-Tei that he pinched himself to make sure that he was not dreaming. As she went and came,—bringing fire and food, or arranging the

chamber of the guest,—her every attitude and motion revived in him some gracious memory of the girl to whom he had been pledged in his youth. He spoke to her; and she responded in a soft, clear voice of which the sweetness saddened him with a sadness of other days.

Then, in great wonder, he questioned her, saying:—

"Elder Sister[5], so much do you look like a person whom I knew long ago, that I was startled when you first entered this room. Pardon me, therefore, for asking what is your native place, and what is your name?"

Immediately,—and in the unforgotten voice of the dead,—she thus made answer:—

"My name is O-Tei; and you are Nagao Chōsei of Echigo, my promised husband. Seventeen years ago, I died in Niigata: then you made in writing a promise to marry me if ever I could come back to this world in the body of a woman;—and you sealed that written promise with your seal, and put it in the *butsudan*, beside the tablet inscribed with my name. And therefore I came back."...

As she uttered these last words, she fell unconscious.

Nagao married her; and the marriage was a happy one. But at no time afterwards could she remember what she had told him in answer to his question at Ikao: neither could she remember anything of her previous existence. The recollection of the former birth,—mysteriously kindled in the moment of that meeting,—had again become obscured, and so thereafter remained.

---

[1] "-sama" is a polite suffix attached to personal names.

[2] A Buddhist term commonly used to signify a kind of heaven.

[3] The Buddhist term *zokumyō* 〈"profane name"〉 signifies the personal name, borne during life, in contradistinction to the *kaimyō* 〈"sila-name"〉 or *homyō* 〈"Law-name"〉 given after death,—religious posthumous appellations inscribed upon the tomb, and upon the mortuary tablet in the parish-temple.—For some account of these, see my paper entitled, "The Literature of the Dead," in *Exotics and Retrospectives*.

[4] Buddhist household shrine.

[5] Direct translation of a Japanese form of address used toward young, unmarried women.

原案

石川鴻齋『夜窓鬼談』より「怨魂借体」
底　　本 国会図書館デジタルコレクション『夜窓鬼談』
https://dl.ndl.go.jp/pid/896581/1/6
参考資料

- 平井呈一 訳『全訳 小泉八雲作品集 第十巻 骨董・怪談・天の川綺譚』〈恒文社、1964 年〉
- 平川祐弘 編『怪談・奇談 小泉八雲名作選集』〈講談社学術文庫、1990 年〉
- 「小泉八雲 お貞のはなし〈田部隆次譯〉　附・原拠「夜窓鬼談」の「怨魂借體」のオリジナル訓読注」Web サイト『Blog 鬼火〜日々の迷走』〈2019 年 9 月 16 日更新〉
- https://onibi.cocolog-nifty.com/alain_leroy_/2019/09/post-6179f0.html

底本を元に、参照資料を用いながら、現代仮名づかいの読み下し文に書き換えました。
原文からの変更点は以下のとおりです。

1. 適宜、改行、および読点「、」を加えました。
2. 句点「。」は、原文から変更した箇所があります。
3. ふりがなを、ののラジオの解釈のもと、加えました。
4. 原文の左側には一部、語義を伝えるためと思われる〈言いかえ的な〉ふりがながありましたが、それについては適宜、採用・不採用を決めています。

英語原文

Project Gutenberg
https://www.gutenberg.org/ebooks/1210

Title: Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things	Most recently updated: October 29, 2024
Author: Lafcadio Hearn	Language: English
Release date: February 1, 1998 [eBook #1210]	Credits: an anonymous Project Gutenberg volunteer

Podcast ののラジオ　好評配信中！

視聴・購読はこちらから
https://gekidannono.com

ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。
みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。
いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作などのあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください。

劇団ののと読む名作文学　小泉八雲作・田部隆次訳　『お貞のはなし THE STORY OF O-TEI』Podcast 版

発行日　令和 7 年 10 月 5 日
著　者　小泉八雲
編　集　劇団のの
発　行　劇団のの
https://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com

※日本語版本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。
　ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。
底　本　『小泉八雲全集第八巻　家庭版』第一書房（1937 年）
初　出　明治 37（1904）年
図書カード URL
https://www.aozora.gr.jp/cards/000258/card59735.html